

# Magnificat / BWV243, 243a (J. S. Bach)

小川与半・著

## 1. Magnificatとは

### ・聖書の中での位置付け

「ルカによる福音書 1.46~55」の、マリアが主を賛える一連の言葉：通称「マリア賛歌」です。ラテン語訳聖書では「崇める」という意味の”Magnificat”という単語から始まるため、「マリア賛歌」が音楽化されたものは「マグニフィカート(またはマニフィカート)/magnificat」と呼ばれています。英語で”magn-“, ”magni-“ が最初に付く単語には magnet(磁石), magnify(拡大する), magnitude(大きさ), magnum(大瓶)などがあり、大きな力や物を表す時に使われます。したがってmagnificatも単に「崇める」ではなく、「偉大なるものと認める」という大元の意味があるのでは、と考えられます。

話を戻し「マリア賛歌」までの経緯が記されている「ルカによる福音書1.5~45」を要約します。

「祭司ザカリヤは、彼の妻エリザベツが洗礼者ヨハネとなる子を宿したことを、主の御使いから知らされる。その数ヶ月後、今度はマリアが、救世主イエスとなる子を宿したことを御使いから知らされる。マリアがエリザベツに会いに行き挨拶をすると、ヨハネは胎内でおどり、エリザベツは聖霊に満たされてマリアを祝福する言葉を贈る。それに答えて、マリアは主を賛える言葉を述べる。」

以下「マリア賛歌」(内容は4. 各曲解説の歌詞対訳参照)が続きます。

教会暦ではこれを記念した「マリア(がエリザベツを)訪問の祝日」(7月2日)というのがあり、ドイツ語マグニフィカートの別名のあるカンタータ第10番(BWV10)などがこの日に演奏されましたが、ラテン語によるこの一連の言葉は教会では伝統的に晩課(夕方から始まる典礼)で使われており、C.モンテヴェルディの晩課のための音楽「聖母マリアの夕べの祈り」の最後を飾ることはご存じの方も多いでしょう。

### ・音楽的な伝統

マグニフィカート用のグレゴリオ聖歌伝来の定旋律で有名なのが第9詩篇唱で、バッハは前出のカンタータ第10番でも使用していますが、本作品では10. Suscepitでオーボエ(BWV243aではトランペット)が演奏するのみです。この旋律はW.A. モーツァルト「レクイエム」(KV626)序曲と終曲にもなぜか登場します。

## 2. 作曲の経緯

1728~1731年に完成したBWV243ニ長調(用途不明)に先立ち、BWV243a変ホ長調(全曲半音高い)が1723年の降誕祭(クリスマス)晩課用に作られました。調性以外の相違は次の2点です。

### ・BWV243aの器楽編成

オーボエ・ダモーレが無く、3. Quia respexit~4. Omnes generationesはオーボエのまま

フルート(トラヴェルソ)も無く、9. Esurientesの助奏はリコーダー2本

10. Suscepitは定旋律がトランペット、伴奏はヴァイオリンとヴィオラのユニゾン、チェロは無し

・BWV243aの4つの挿入曲 クリスマス向きの4つの挿入曲と、それらの演奏場所の指定があります(ニ長調版のヴォーカルスコア [Bärenreiter] 付録ではそれらが半音低く転調されています)。これらの挿入曲の正確な由来はまだわかりませんが(資料求む!)、バッハのオリジナルではなく、クリスマスに教会で歌われている伝統的なものからの引用だったようです。

A. 合唱ドイツ語 (S-A-T-B) 器楽の指定無し、変ホ長調、2/2拍子

2. Et exsultavitの後に。「クリスマス・オラトリオ」でもお馴染みのルター・コラールです。

Vom Himmel hoch da komm ich her,

ich bring euch gute neue Mär,

der guten Mär bring ich so viel,

davon ich singn und sagen will.

高き天より私は来て

おまえたちに良い新しい知らせをもたらそう。

良い知らせをたくさん持ってきたので、

私はそれらについて告げ歌おう。

B. 合唱ドイツ語 (SI-SII-A-T) 通奏低音、変ロ長調、3/4拍子

5. Quia fecitの後に。

Freut euch und jubiliert,

zu Bethlehem gefunden wird

das herzliebe Jesulein,

das soll euch Freud und Wonne sein.

喜び歓呼せよ、

ベツレヘムにて見い出された

心より愛しき幼子イエスを。

彼こそおまえたちの喜びであり至福である。

C. 合唱ドイツ語 (SI-SII-A-T-B) オーボエ 2、弦、通奏低音、変ホ長調、4/4拍子

7. Fecit potentiamの後に。ミサのグロリアの最初の2文です。

**Gloria in excelsis Deo!**

**Et in terra pax hominibus bona voluntas.**

**いと高きところでは神に栄光あれ!**

**地上ではみ心にかなう人々に平和あれ!**

D. 二重唱ラテン語 (SI-B) 通奏低音、へ長調、12/8拍子

9. Esurientesの後に。1725年にBWV110/5に転用されました。

Virga Jesse floruit,

Emanuel noster apparuit

induit carnem hominis,

fit puer delectabilis. Alleluja.

エサイ(植物の名)の若芽が花咲き、

私たちのエマヌエル(救い主)も現われたまう。

受肉されて人となられ、

私たちの喜びとなる。ハレルヤ。

### 3. 主な特徴

- ・他のバッハのラテン語宗教曲同様、ダカーポ形式の曲がありません。
- ・「ミサ曲ロ短調(BWV232)」同様、合唱は5声を中心となっています。
- ・言葉の各曲への分け方/各曲の曲想は、モンテヴェルディの晩課と多くの共通点があります。
- ・各曲が短く、非常に凝縮された印象を受けます。
- ・言葉の音楽的修辞(言葉の意味を音楽が具体化する)が見事になされています。

### 4. 各曲解説 歌詞は全てラテン語です。対訳の太字は一般的に合唱で歌う曲です。

1. Magnificat 全合奏、ニ長調、3/4拍子

**Magnificat anima mea Dominum.**

**私の魂は主を崇めます。**

トランペット3本とティンパニ(古くは特権階級の音楽のための楽器)を伴ったニ長調(D:ラテン語で「Deo = 神」の頭文字)の3/4拍子(3:三位一体の象徴)という、神を賛える音楽の典型的な3大要素を持ち合わせた曲です。8分音符の上昇分散和音は主への賛美を、16分音符の動きは聖霊の訪れを表現しているという説(丸山桂介氏)があります。

2. Et exultavit ソプラノII、弦合奏、ニ長調、3/8拍子

Et exultavit spiritus meus in Deo salutari meo.

そして私の霊は神が遣わされた

わが救い主を喜び待ちます。

救い主への期待に満ちた、明るい雰囲気は支配的です。exultavit(喜び待つ)という言葉に付けられた、仰ぎ見るような上昇旋律は1. Magnificatの中の8分音符の上昇分散和音から来ています。

3. Quia respexit ソプラノI、オーボエ・ダモーレ、通奏低音、ロ短調、4/4拍子

Quia respexit humilitatem ancillae suae:

この卑しい女をさえ心にかけてくださいました。

ecce enim ex hoc beatam me dicent.

ごらん下さい、今からのち、

私を幸いな女と言うでしょう。

自らを謙遜するかのような控え目な編成による短調の曲です。中でもhumilitatem(卑しい)という言葉に付けられた、隠れ入るような下降旋律が象徴的です。

4. Omnes generationes トランペットとティンパニを除く全合奏、嬰へ短調、4/4拍子

**Omnes generationes.**

**(人々が)子々孫々に渡って。**

歌詞・音楽共々前の曲の続きです。主題が折り重なるストレットと共に、同じ言葉が反復されることより、物事が代々引き継がれる様が描かれます(他の例では「マタイ受難曲」50d."Sein Blut komme...")。中でも主題が音階的に積み重なる第5~8小節、第15~20小節が聴きどころです。

5. Quia fecit バス、通奏低音、イ長調、4/4拍子

Quia fecit mihi magna,

主が私に大いなる事をしてくださったのは、

qui potens est, et sanctum nomen eius.

主が力ある方で、

主のみ名は神聖であるからです。

前曲もそうでしたが、主題の最初の同音反復は、確かな歩みの象徴です。曲調は主への信頼に基づく明るさが支配的となります。

6. Et misericordia アルトとテノール、フルート2、弦、通奏低音、ホ短調、12/8拍子

Et misericordia a progenie in progenies

主の憐れみは代々、

timentibus eum.

主をかしこみ恐れる者に及びます。

弱音器付きの弦とフルート(BWV243aでは弱音器無しの弦のみ)の柔らかい響き、短調の哀愁を帯びた美しい旋律が、神の憐れみを象徴しています。

7. **Fecit potentiam** 全合奏、ニ長調、4/4拍子

**Fecit potentiam in bracchio suo,  
dispersit superbos mente cordis sui.**

主は御腕をもって力をふるい、  
心の思いの驕り高ぶる者を追い散らされます。

全体の中心として器楽は再びフル編成です。potentiam(力)という言葉に付けられた打ち付けるような付点のリズム、dispersit(追い散らす)の部分の飛び散るような8分音符の分散和音などが象徴的です(後者と同様の例として「マタイ受難曲」第14曲の中のイエスの言葉"Ich werde den Hirten schlagen..."の部分の弦楽器伴奏の16分音符の分散和音があります)。

余談ですが、弦楽器ヴィオラはバッハの時代には様々なものがありました。足(イタリア語で"gamba")で支えるViola da gambaはカンタータ第106番「神の時は最良の時」で活躍するので有名ですが、現在も残っている普通のヴィオラは、正式にはViola da braccio(腕で支えるヴィオラ)と言います。ブラームスの交響曲の総譜のヴィオラ・パートにBratcheと記してあるのはその名残です。

8. **Deposuit potentes** テノール、ヴァイオリン、通奏低音、嬰へ短調、3/4拍子

**Deposuit potentes de sede  
et exaltavit humiles.**

権力ある者を王座から引き降ろし、  
そして卑しい者を引き上げなさいます。

deposuit(引き降ろす)、sede(座)という言葉に付けられた厳しさを帯びた下降旋律、potentes(権力ある者)の部分の力を誇示する、もしくは権力を嘲るような跳躍旋律、exaltavit(引き上げる)の部分の優しく緩やかな上昇旋律、humiles(卑しい者)の部分の下降旋律などが象徴的です。

9. **Esurientes** アルト、フルート2、通奏低音、ホ長調、4/4拍子

**Esurientes implevit bonis  
et divites dimisit inanes.**

飢えている者を良いもので充たし、  
富んでいる者を空しく帰らせなさいます。

implevit(充たす)という言葉に付けられた上昇旋律(第9小節など)、divites dimisit(富んでいる者を帰らせる)の部分の下降旋律(第12小節など)が象徴的です。

10. **Suscepit Israel** オーボエ、通奏低音チェロのみ、ロ短調、4/4拍子

**Suscepit Israel puerum suum,  
recordatus misericordiae suae.**

主は僕イスラエルを助けてくださいました。  
憐れみをお忘れにならなかったからです。

ヴォーカルスコア [Bärenreiter] の脚注には「この曲が合唱と独唱者のどちらで演奏されるべきかは原典(自筆総譜)からは明かではない。編者(A.デュル)は独唱者の使用をお勧めする。」とあります。この根拠はこの曲の主役が声楽ではなく、既述のオーボエ(BWV243aではトランペット)が奏する定旋律だからです。したがって合唱で演奏する場合は静かに歌う、あるいは小人数で歌うなどの工夫がなされるかもしれません。

11. **Sicut locutus** 通奏低音、ニ長調、2/2拍子

**Sicut locutus est ad patres nostros,  
Abraham et semini eius in saecula.**

私たちの祖先、  
アブラハムとその子孫に語られた通り  
永遠に(憐れんでくださったからです)。

音楽の発想は4. Omnes generationesと同様なのでしょう。「マリア賛歌」はここまでです。

12. **Gloria Patri** 全合奏、ニ長調、4/4~3/4拍子

**Gloria Patri, gloria Filio,  
gloria et Spiritui sancto!  
Sicut erat in principio et nunc  
et semper et in saecula saeculorum.  
Amen.**

栄光、御父にあれ、栄光、御子にあれ、  
そして栄光、聖霊にあれ!  
初めにありましたように、今も、  
また世々に限りなくあらんことを。  
アーメン。

「頌栄(しょうえい)誦」と言われる、三位一体を讃える一連の言葉が最後に歌われます。第20小節からはsicut erat in principio(初めにありましたように)の歌詞通り、第1曲の音楽が再現されます。

\*参考資料・リリンク指揮CD(35DC 181) 添付の丸山桂介氏の解説および歌詞対訳

・ガーディナー指揮CD(411 458-2) 添付のA.デュル解説

・「バッハ/シュヴァイツァー著」白水社

//